

早期乳児期に発生せる肺嚢腫の1例

日本赤十字社産院 (院長 久慈直太郎)

戸 井 田 嘉 子
ト イ ダ ヨシコ

(受付 昭和34年7月1日)

I 緒 言

乳児や幼児における肺空気嚢腫は次のような色々な機転によりおこる。即ち先天性奇形、弁状にひつかかった気管支栓塞、肺壞死(細菌又はかび)、エヒノコックス、外傷等である。そしてこれに対する処置としては根治的に嚢腫の切除をすすめる説もあるが、又自然消滅を期待して長期に観察すべきで、稀に突然急激な嚢腫の膨脹をおこし呼吸困難を生じた時と、自然消滅しない先天性奇形によるもののみ外科的切除を行うとの説もある。なおこの嚢腫が存在しても子供は普通に發育するものと云われている。更にこれが先天性か、後天性かをレントゲンで判定することは非常にむづかしく、切除された嚢腫の顕微鏡的検査においてさえこれを決定するのは困難とされている。最近著者らは早期乳児期において発生し、自然消滅した肺嚢腫の1例をみたので報告する。

II 症 例

患者：昭和32年11月10日生、男児

主訴：チアノーゼ、呼吸困難

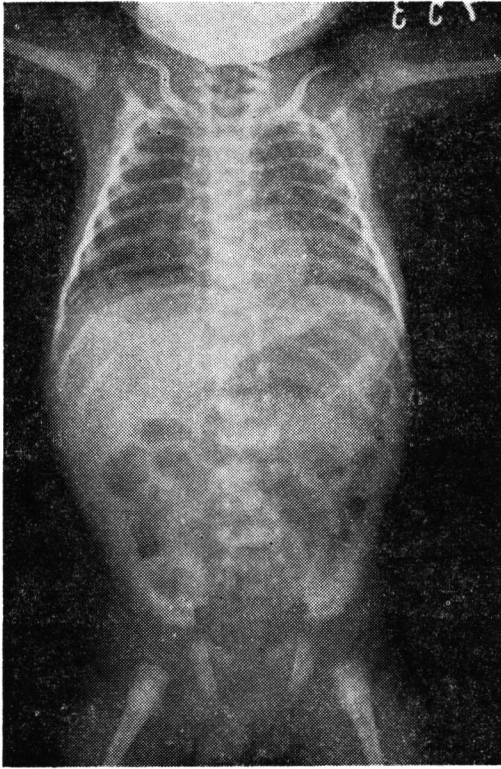
家族歴：特記すべきことなし

既往歴：母は32才の高年初産婦で分娩は予定日より36日早く即ち在胎35週の未熟児であり、初体重1646g、分娩時は早期破水のあつた他、仮死その他の変化を認めない。

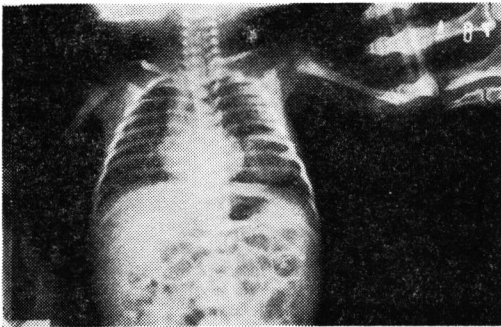
臨床経過 生後3日間は羊水様吐物を時々みている。生後4日目に始めてポリエチレンカテーテルを挿入、5ccの人乳を注入し始めた。その後時に少量の吐乳をみたが順調にすすみ、生後14日目よりカテーテルを除去し、経口哺乳に変えた。この時の哺乳量は1回量約40cc1日8回であつた。カテーテル除去後2—3日の間は1日に2回位吐

乳をみたが再び嘔吐が止り正常にすぎた。生後21日目に至り突然顔面にチアノーゼをおこし哺乳力衰えたが発熱なく、理学的所見に特記すべきものもなく、一時的なものですぐ回復し又順調にすすんだ。然し吐乳はその後時々あつた。生後29日目頃より哺乳力に変化はないが何となく活気がなくなつた。生後31日目に至り、哺乳中あまりほしがらないので一時哺乳を停止して抱いていると鼻部口周にチアノーゼを来し、顔面蒼白、呼吸困難、心音微弱となつたので、酸素吸入を行い胸部の軽いマッサージ、強心剤の皮下注射によりその日の中に次第に回復した。哺乳は半日中止し、再びカテーテルにて人乳8ccより注入を開始し、生後35日目には50ccを経口的に飲むよになつた。生後32日目に撮つた胸部レ線では左下部に縦に長い陰影を認める。(第1図)理学的所見に異常はなかつた。上記のように哺乳力は回復するも全身状態は元氣なく蒼白、呼吸浅く、時々軽いチアノーゼをみた。生後38日目に至り相変わらず蒼白で哺乳時にチアノーゼを来す為再びカテーテル栄養に変え、30cc位注入するが時にチアノーゼの為10cc位しか注入し得ない時や注入停止の時もあつた。生後39日目に撮つた胸部レ線像では左下部に壁の厚い中央のやや透明化した空洞状の陰影を認める。(第2図)理学的所見異常なし。その後3—4日は蒼白なるも安静に経過したが生後42日目に強度のチアノーゼ、呼吸困難となり1日間哺乳を中止している。この頃より時々咳嗽発作をみる。このように生後46日目までは時々チアノーゼ、呼吸困難をくりかえしていたがその後全身蒼白なるも元氣が出てきて経口的に哺乳を行うよになつた。この頃より咳嗽発作もなくなつて順調に経過した。な

Yoshiko TOIDA (Japan Red Cross Maternity Hospital) : A case of pulmonary cyst developed during early infancy.



第 1 図

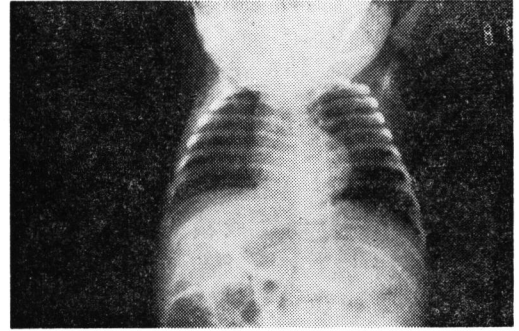


第 2 図

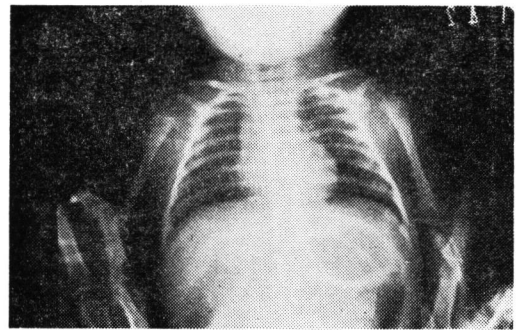
は、全経過中発熱は殆どなく、体重は生後38日目～47日目の間に下降をみせたがその前後は上昇している。生後72日目の胸部レ線像では壁の薄いきれいな肺嚢腫の陰影を認め(第3図)、この時は全身蒼白の他は元気あり、哺乳力良好で特変はない。生後86日目の胸部レ線像は大部小さくなった嚢腫を示す。(第4図)しかし生後94日目に至るとレ線上には嚢腫を全く認め得なくなっている。(第5図)子供は生後112日目に退院、この時の体重は3700gとなり、顔色はあまりすぐれないが特変はなかつた。退院後27日、即ち生後139日目にも、ここにはあげてないがレ線上何も認めら

れていない。

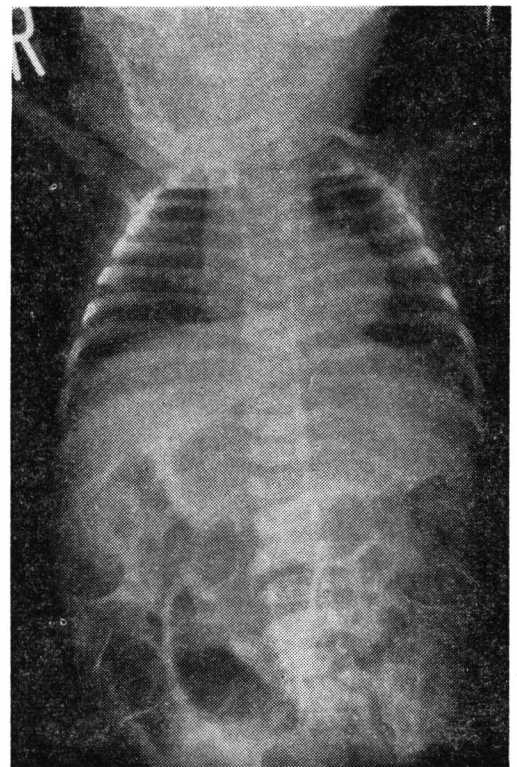
現在この子供は1年7カ月で体重8900g、両足



第 3 図



第 4 図



第 5 図

に軽い痙攣性麻痺がみられるが特にひどい智能のおくれはみられず、今日に至るまで呼吸器上の疾患として特筆するものに罹患していない。

治療：呼吸困難時に強心剤を注射した他は生後31日目に1回マイシリン0.25gを筋注，その後生後37日目より59日目までマイシリン0.25g筋注を1日2回，その後1日1回として生67後日目で中止している。

検査成績

A 血液所見：

a) 血色素 生後9日目，125%にてその後次第に下降し，生後65日目に58%，再び上昇して生後107日目には84%になる。

b) 赤血球数 生後9日目に480万，65日目に311万，107日目に352万となる。

c) 白血球数 生後9日目に8600，23日目に8200，37日目に10500，49日目に10800，65日目に10000，93日目に9900，107日目に9600となつている。

B ツベルクリン反応陰性(生後70日目)

C 咽頭部粘液塗抹検査(生後44日目)グラム陽性桿菌(+), グラム陽性球菌(+), 結核菌(-)

III 考 按

肺嚢腫をおこす種々の原因の中，本例は臨床経過及び胸部レ線像からみて，嘔吐による嚥下性肺炎より気管支の弁状栓塞をおこした為に発生した

後天性肺嚢腫と考えられる。全経過を通じて殆ど発熱がみられていないが，これは新生児や特に未熟児における肺炎にはしばしばみられる所であり，理学的所見の欠除も新生児では往々にしてあり，これはごく一時的に異常を認める事もある所から，全く欠除するのではなく偶然見落すのかもしれない。又体重増加は呼吸困難，チアノーゼを頻繁に繰返した10日間下降をみせた他は順調な上昇をみせているが，これは肺嚢腫とは限らず，著者の経験では新生児において肺炎等の合併症のある場合，最悪期の小期間を除いては，呼吸困難，チアノーゼがあつても哺乳力はあまり衰えず，体重増加もみる事が多いものである。

IV 摘 要

早期乳児期において吐乳による嚥下性肺炎より後天性の肺嚢腫をおこし，自然消滅し，その後呼吸器に異常を認めない1例について報告した。

撰筆するに当り，御校閲を賜つた日赤産院久慈直太郎先生及び御助言を頂いた東大小児科馬場一雄先生及びいろいろ便宜を給つた日赤産院副院長三谷茂先生に心から感謝致します。

文 献

- 1) Coffey, J. : Pediatrics, 11 48 (1953)
- 2) Emery, J.L. : Lancet, 1 405 (1956)
- 3) Korngold, H.W. & Baker, J.M. : Pediatrics, 14 296 (1954)